長崎におけるフルベッキの人脈

村　瀬　寿　代

はじめに

オランダ改革派宣教師、フルベッキ(Guido Herman Fridolin Verbeck,1830-1898) は開国直後の1859年に来日し、上京するまでの約十年を長崎で過ごした。日本の状況を見て直接の伝道は不可能と判断したフルベッキは、まず日本人との友好的な関係を築くことが重要であると考えた。最初は語学を教え、あらゆる西欧の知識を教授することで日本の優秀な若者たちと接するようになる。フルベッキと交友があった者は大隈重信・副島種臣・何礼之・西郷隆盛・西郷従道・大久保利通・伊藤博文・井上馨・後藤象二郎・横井小楠等数え上げればきりがないほどの錚々たる人物達がいたと言われている。その人脈を通して彼は後に東京に招かれ、明治新政府で御雇い外国人としては破格の好待遇を獲得する。

フルベッキは日本で過ごした四十年足らずのうち、亡くなるまでの約二十年を、主に宣教に従事しているが、彼の宣教の仕方、日本や日本人に対する考え方は、長崎で接触した日本人を通して培われた部分が多いと考えられる。ところが、長崎での人脈に関しての詳細な研究は比較的少ない。そこで、長崎でどういう人物たちと、どのような交友があり、それがどのように展開していくかに焦点を絞って、具体的に考えてみたい。

フルベッキは1860年春から個人的に自宅で生徒を教え始めた。後に、通弁要

請のために長崎におかれた幕府直轄の学校済美館と、大隈重信・副島種臣らが中心となって、佐賀藩が長崎においた致遠館で彼は中心となって教授する。済美館と佐賀の関係を中心に生徒達との繋がりを考える。

1. 聖書と英学を学んだ佐賀藩士、本野周蔵

まず、聖書学習を通じてフルベッキに学んだ佐賀藩士について考察する。1866年5月20日（慶応2年4月6日）、佐賀藩の家老村田若狭とその末弟の綾部は長崎でフルベッキから洗礼を受けた。日本で第三番目の新教の受洗者である。村田若狭は1854年（安政元年）英国軍艦が長崎に来た時、海上で拾った聖書を見て以来、キリスト教に興味を持ち研究した。彼は長崎のフルベッキに弟綾部を送り、聖書を学ばせる。[1] 村田若狭の家臣、本野周蔵[2] はフルベッキの下で英学を学修すると同時に、村田若狭の命で聖書についても学んだ。彼は最も早い時期にキリスト教を通してフルベッキと接触を持った人物の一人である。しかし、本野とフルベッキの最初の接触について述べられたことはなかったのでこれを証明する。

最初にキリスト教を通して接触してきた人物を、フルベッキは1861年3月16日（文久元年2月6日）付の書簡で伝道局に報告している。

「一昨日、一人の日本の役人に『四福音書』を与える機会があって喜んでいる次第です。この役人は長崎からかなり離れた所にいる友人に右の聖書を送り届けたのです。以前にもキリスト教の真理を書いた小冊子を彼に与えたことがありました。ところが、同じ問題についてもっと詳しく書いた書物を欲しいといって来たので、前述の福音書とマーチンの『天道溯源』、いずれも漢文の書籍を与えたのです」[3]

「一昨日」つまり1861年3月14日（文久元年2月4日）に、『福音書』と『天道溯源』を「役人」に与え、しかも以前にも「小冊子」を与えたとある。文中の「役人」は、この書簡の発信以前にも来たことがあった。「長崎から離れた所にいる友人」のために、とあるが何処であるか場所の記述はない。後述するが、「長崎から離れた場所」とは佐賀と考えられる。同時期に長崎にいた佐賀藩士

を調べる。

『中牟田倉之助伝』によると、1861年4月3日（文久元年2月24日）、佐賀藩士中牟田倉之助と秀島藤之助は共に来崎する。中牟田の親友石丸虎五郎と馬渡八郎は、その時すでに鍋島閑叟の命で長崎に在った。[4] 続いて次の記述がある。

「二十七日［文久元年二月］の晩、石丸［虎五郎］の案内にて、両人共に蘭人ホーゲルに入門す。（中略）九月二八日［文久元年］、急命に依りて佐賀に帰るまで、子爵［中牟田］の長崎に在ること凡そ七カ月に亙る。（中略）午前は三島通詞に赴き、午後若くは晩は蘭人ホーゲル等に赴き、英学研究に没頭して日を送りぬ。初めは概ね、石丸、秀島［藤之助］と相携へ、後には本野周蔵と共にせしことあり」[5]［常用漢字に変換］

中牟田倉之助は文久元年二月から蘭通詞や蘭人について英学を研究するが、本野と共にしたことがあると言っている。本野がいつ来崎したのかは記していないが、文久元年二月頃には長崎にいたのである。この時期に本野が長崎にいたことを証明してくれる文献は他にはない。上述のフルベッキ書簡で、「役人」が訪問した時期とほぼ同時期であることは注意を引く。さらに、『中牟田倉之助伝』では本野とフルベッキの直接の接触についても報じている。

「子爵［中牟田］が、石丸（虎五郎）、本野（周蔵）と相携へて宗福寺に抵り、フルベッキに会ひて、数学の教導を請へるは二月二十九日［文久二年］の夜なりき。フルベッキ欣然、之を諾し、七日には一日、土曜日には午後に来れといふ。一同快然たり。併しながら、尚、不足の感あるを以て、三月四日、石丸の案内にてパーカを尋ね、時々算術の質問をなしたき旨を請ふ。パーカも快諾す。翌五日、フルベッキに金壱両の陶器を贈る。パーカより、トリゴノメトリー・エルジブレーの書籍二冊を借る。蓋、三角術と代数学との書なり。かくて三月七日、初めてフルベッキに就いて学修を開始し、爾来、或はフルベッキに赴き、或はパーカに赴き、敢て怠ることなし。（中略）或は会話書を封読し、或は文法書を封読せり。時としては本野も之に加はり、長州の明田青淵も亦之に加はり、会読を催せることすらありき。想ひ見る、弊衣短袴の青年、一脚の卓を囲んで相封坐し、蟹行の文字に眼を曝して、不可思議なる、「ガランマ」

（文典）といふものに驚嘆と錯愕との声を発しけむ。彼等は当惑の余り、数学のフルベッキを叩いて英書の教授を請ひたることあり。篤学なる青年かな。フルベッキ之を愛して懇切に指導し、英書を与へたることもありき」[6]［常用漢字に変換］

1862年3月29日（文久2年2月29日）、中牟田、石丸、本野は数学の教導を請うためフルベッキの居住する宗福寺に行く。本野とフルベッキの接触において名前と日付が具体的に出てくるのは、これが最初である。本野は中牟田等佐賀藩士達と共に学び、フルベッキのもとで学修をしていた。本野には英学を修めることに加え、もう一つの目的である聖書を研究する命を村田若狭から受けていたことは先に述べた。キリスト教禁制下、『中牟田倉之助伝』で全く宗教のことには触れていないのは当然である。中牟田達は本野がキリスト教に興味を持っていたことさえ知らなかったであろう。もちろん、本野が聖書研究をするなど、自分から告げるはずがない。しかし、フルベッキに英学を学ぶと同時に聖書についても尋ねていたと考える方が自然ではないだろうか。

本野が佐賀藩士等とフルベッキに学んでいた同年、1862年8月26日（文久2年8月2日）付のフルベッキ書簡で「聖書の読者」についての報告がある。

「わたしは、日本において三人の着実な聖書の読者について記録します。一人はわたしの家におり、その日本人と関連ある二人はここから八〇マイルばかり離れた肥前の国の首府にいる方々です。それはいつかの手紙で申し上げたことのある、わたしから聖書を受け取った人々です。二週間前、この三人組の一人が、政府の用務を帯びて当地に来ていくつかの不明の点の説明をもとめるため、わたしにも会いに来ました。三人はいずれも立派な学者であり、新約聖書の英訳、蘭訳および二種類のちがった漢訳をもっているのですが、まだ解らない点があるのは当然のことです。この一人は英学修業のため藩主から派遣されて来たので、暫く長崎に住んでいます。昨日の朝、わたしのところに来て、正規の日課とは別に彼のために英訳の聖書を読んで下さらぬかと申したのです。これは彼自身ばかりでなく肥前にいる二人の友人の希望でもあると言うのです。そうすれば、二人の友人も自分と同じ聖書の個所を学べるからとのことで

す。それは、彼自身がわたしの説明などによって、学習したところを二人の友人に伝えられるからとのことでした。無論わたしは、この申し出を承認したばかりでなく、むしろ本人の提案を激励したのです。それでこの日本のニコデモは（夜来るから）約束どおりその日やって来てマタイによる福音書の第一章を読みました。今後、一週間に二回つづけて来ることでしょう」[7]

この書簡で「肥前」という場所が具体的に出てくる。「いつかの手紙で申し上げたことのある、わたしから聖書を受け取った人々です」というのは、前述の書簡で1861年（文久元年）に「役人」、つまり本野が聖書を受け取り、それを「友人」、つまり佐賀の村田若狭と綾部に送り届けたとするとつじつまが合う。この書簡を要約すると、肥前に聖書を研究する者が三人いる。一人はフルベッキの家に住んでいる。藩派遣の英学修業の一人は、暫く長崎にいて、佐賀の二人のために聖書を学び始めた。「藩派遣の英学修業の一人」は本野だと思われる。「正規の日課」というのは、中牟田達とフルベッキについて学んでいたことをいうのであろう。この書簡の発信は文久二年八月二日で、本野が中牟田達とフルベッキの居住する宗福寺へ赴いたのが文久二年二月二十九日、約五カ月のずれがある。この数カ月のずれはあまり注意する必要はないだろう。本野はフルベッキに学んだ聖書の個所を村田若狭に伝えるため、長崎と佐賀を往来していた様子である。長崎に継続して滞在していたわけではない。フルベッキの伝記*Verbeck of Japan*の本野に関する記述でも、彼が「振り子」のように長崎・佐賀を行き来していたことが述べられている。[8] 中牟田はこの年四月に上海に渡航するので、フルベッキに就いて学んだのは短期間のはずである。本野は表向きは英学修業であるので、中牟田等佐賀藩士と共にフルベッキのところへ出かけて学んでいたのであろう。聖書研究に関しては人に知られないように夜やって来て密かに学んでいたと考えられる。今まで、本野はキリスト教関連の本を受け取ったり、聖書についての質問を村田若狭に代わってやっていたのだが、本格的に聖書を学ぶことになったものと思われる。「肥前にいる二人の友人」とは村田若狭とその弟綾部であろう。村田若狭は家老の身分であるので、自らは長崎に行くことはできない。「一人はわたしの家におり」というのが問

題であるが、これも村田若狭から聖書研究のためフルベッキのもとに派遣されていた綾部である。この時点で彼は佐賀に戻っていたようである。

何故なら、1863年1月24日（文久2年12月5日）付の、「1862年の年報」に次のようにある。

「もう一人の生徒はこの春以来［バイブルクラスに］出席しておりましたが、ハシカのため隣の藩の彼の家に余儀なく帰り、その後秋になって、他に二人の人を伴って帰って来ました。これらの三人のものは、この港に英学研究の施設があるので藩主から派遣されて来たのです。一週間二度わたしの所に来て、『ヨハネによる福音書』を読んでおりましたが、なかなかよくできるようになりました。わたしは一年ばかり前に、その一人に聖書やその他の書籍を与えておったのですが、彼はここに来る以前すでに漢訳の福音書を普通の知識ある日本人ならば読み得る程度で、読んでいたのです」[9)]

春からバイブルクラスに出席していた一人の生徒、つまり、綾部はハシカのために一時帰国していた。先の手紙にあるように、本野が夜、聖書を学ぶようになった時には、本来ならばフルベッキの所に住んでいるはずの綾部は、ハシカで佐賀にいた。その後、綾部はこの書簡にあるように二人を伴い長崎に戻ってきた。二人の内、一人は本野であろう。「一年ばかり前に、その一人に聖書やその他の書物を与えた」とあるのは、1861年（文久元年）に、本野がフルベッキから書物を受け取ったことを言っているのだろう。もう一人の方は誰であるか不明である。

フルベッキ書簡の記述が複雑なことから、聖書研究で来た佐賀藩士については諸説があってはっきりしていなかった。村田若狭はまず本野をフルベッキのもとに送り、彼を通じて聖書などキリスト教の書物を受け取る。そして、弟の綾部をバイブルクラスの生徒として学ばせる。その後、本野も本格的に聖書研究をする。本野は学んだことを、佐賀の村田若狭に伝え、村田若狭と綾部の受洗となる。非常に複雑なフルベッキの記述ではあるが、こう読みとると無理がない。本野はおそらく、佐賀藩士の中では最も早くにフルベッキに接触した人物の一人である。文久元年からフルベッキに教えを受けた佐賀藩士は他にもい

るが、キリスト教を通じて接触した人物は見当たらない。村田若狭はフルベッキの来日前から聖書に興味を示していたが、独学で理解することは不可能であった。フルベッキが来崎すると、時期を見て本野や弟の綾部を送り、学ばせたものと思われる。聖書の研究を通じてフルベッキは早くから佐賀藩と関係を持った。それが、後に佐賀藩とフルベッキの密接な関係へと繋がっていくのである。

2. 佐賀藩士、大隈重信

大隈重信とフルベッキの関係はよく知られている。致遠館設立以前から、大隈は長崎でフルベッキに師事していた。彼はキリスト教徒処罰問題について、パークス公使と論争したことで、外交の華々しいデビューを飾った。その時のことを、「彼のフルベッキよりして学ひ得たる基督教の智識は其時、余に向って少なからさる利益を与へたり。余にして若し其智識なかりせは、或は漫に基督教は邪宗なり、魔法なりとの言語を以て反対を試み、彼等各国公使をして日本政治家の無学無智を嘲笑せしめしやも知るへからす」[10]［常用漢字に変換］と、フルベッキから学んだキリスト教の知識が非常に有用であったことを語っている。大隈はキリスト教者ではないが、キリスト教の知識を通して新政府に一目置かれるようになった。宗教について学ぶきっかけについて、彼は「基督教の宣教師と称せられたるウ井リアム、并にフルベッキ等に就て英書の質問をなし、且其講義を聴きしとありしか、少年者の好奇心として側ら基督教の事をも研究せんと思立たり」[11]と言う。「少年者の好奇心として」研究しようと考えたのではあるが、全くの下地なくして禁制であるキリスト教を学ぶ気になったというのも不自然である。その「好奇心」は、村田若狭、本野周蔵によって得たのではないだろうか。大隈は佐賀藩家老、村田若狭とは親しい関係で、安政年間から村田若狭の家に出入りしており、彼から新知識を得ていたようだ。[12]本野も大隈も村田若狭の養父から教育を受けたことがあった。[13]フルベッキに学び始める以前から、キリスト教について村田若狭から聞いていただろうことは十分考えられる。村田若狭・本野周蔵と交友があったことで、フルベッキに

聖書を学び、それが結果的に1869年（明治2年）のパークスとの論争において役立ったとしても、不自然ではないだろう。

1869年6月11日（明治2年5月2日）、フルベッキは遣外使節の建白書を大隈に提出している。ブリーフ・スケッチ(Brief Sketch)と呼ばれるこの建白書には、「宗教的寛容についての覚え書き」(Note about religious toleration)の項が貼付されている。[14] 東京で政府雇いとなってからは伝道する暇のなかったフルベッキが唯一、宣教の仕事として行った献策である。しかし、大隈はフルベッキの建白書を秘匿する。大隈や副島が聖書を学び始めると、「副島と大隈とは表面尊王攘夷の美説を唱ふるも、実は心気已に腐敗して今は専ら邪宗引入れに従事するものなり」[15] と流言された。大隈はこの噂に非常に悩まされたようで、それだけに宣教師からの建白書をすぐに公表はできなかったと察せられる。秘した後、機会を見て世に出し、自分が行くつもりであったのだ。大隈自身はキリスト教の道徳的な側面に共感したものの、信仰を持つことはなかった。結果的には周知の如く、岩倉遣外使節団派遣となるが、フルベッキがキリスト教を教えた旧知の大隈に建白書を提出したのは興味深い。

3. 初期の生徒、何礼之と平井義十郎

フルベッキは来崎後の数カ月間、日本語習得のために猛勉強をする。この期間に定期的に接触した日本人は彼の雇った語学教師だけである。フルベッキの私的な生徒に関しては『フルベッキ書簡集』の1860年10月16日（万延元年9月3日）付で伝道局に報告しているのが最初である。

「現在四名の生徒がわたしのところで英語を学んでいます。二人は政府の通訳、他の二人は普通の生徒です。春には八名の生徒がいました。あるものは一週に二回、他のものは隔日に来ました。あまりにもわたしの時間をとりすぎるので、今の数に限定しました」[16]

この「四名の生徒」はフルベッキの最も初期の生徒達であり、誰であったのか興味のあるところである。「二人の普通の生徒」の一人は大山巌といわれているが、[17] 確定はされていない。生徒達の内、「二人の政府の通訳」に関して

は、従来触れられたことさえなかったので、この人物について考える。「政府」で働く「通訳」という重要な手がかりが述べられていることは注目に値する。では、「二人の政府の通訳」はその後どうなるのか。フルベッキは「1860年12月31日（万延元年11月20日）までの年報」で再び報告する。

「語学の研究はわたしの日課でした。わたしの研究は少数の英学生を指導するために、時々さえぎられました。四人の英学生（その一人は通訳でした）は、三期間、着実に出席していました。最初は約二倍でしたが、一クラスにすることができなかったので四人以外はおことわりしました。うち二人が役所で階級が二つくらい上がったので、新しく入学を志願する者が殺到しましたが、これを辞退しました」[18]

「四人の英学生」は続けてフルベッキに学んでいた。そして、「二人が役所で階級が二つくらい上がった」のである。役所で働く二人は「階級が上がった」つまり、昇進したというのが新たな手がかりとなる。また、この二人の昇進により「新しく入学を志願する者が殺到した」のであるから、この頃からフルベッキが英学教師として評判になってきたことがわかる。この書簡での報告の翌年、1861年（文久元年）の年報になると、「英学生は七名で、その内三名は政府の通訳」[19]と、人数は増えているが、「政府の通訳」という以外に具体的に記述していない。1862年（文久2年）からは全く具体的な人数を欠いているのは、生徒数が増えてきたためであろう。問題の政府の「二人の生徒」が最後にフルベッキ書簡に登場するのは、1864年8月22日（元治元年7月21日）付である。フルベッキが幕府の済美館で教え始めたことを伝道局に報告しているのだが、「二人の生徒」について最も詳細に報じている。

「昨年の夏［1863年］上海から帰って来た時、長崎奉行から話があって、最初わたしがここに来た当時、すなわち1860年にわたしが英語を教えていた二人の生徒は役所で二度も昇進していましたが、その英語の熟達ぶりに満足の意を表し、長崎で幕府所管の学校（済美館）の外国の学問と語学を受け持つためわたしを招聘する旨を奉行が江戸表に行った時、幕府に上申したということでした」[20]

この書簡には最も重要な情報、「長崎奉行が二人の生徒の英語の熟達ぶりに満足の意を表し」たことと「済美館に招聘」のことが述べられている。つまり、フルベッキが済美館に招聘されるに至るには、この「二人の生徒」の英語の上達がめざましく、それが認められたと読みとれるので、済美館関連者である可能性も否定できない。「二人の生徒」の情報として、役所の通訳で、二度昇進し、長崎奉行を知っており、おそらくは済美館に関連する者であろうことが考えられる。フルベッキが記録しているのはこれですべてであるので、この情報を手がかりとして、違った方向から「二人の生徒」の条件を満たす人物を考える。

グリフィスの*Verbeck of Japan*によると、1863年（文久3年）フルベッキ一家は一時上海に避難した後、同年10月（旧暦9月）に長崎に戻った。その時、1860年に英語を教えて二度昇進した若者二人(the two young men to whom in 1860 he had taught some English, had twice promoted)が、外国人は特に豚を好むのだと考えて、豚をみやげにあらわれたとある。[21] この二人は若者であり、英学ですでに名を確立した者ではないであろうと推定できる。また、フルベッキ書簡の文面から判断すると、「二人の生徒」は英学に熟練した者ではなく、急速に頭角をあらわした者という印象が強い。

役所の通訳として考えられるのは英語を兼学した蘭通詞、あるいは唐通事であるが、余りにも人数が多く特定しにくい。済美館関連であれば、長崎奉行を知っていて当然であるのでこの線を辿る。まず蘭通詞を見ると、初代の学頭である楢林栄左衛門と西吉十郎が挙げられる。どちらも蘭通詞の名門の出である。楢林栄左衛門はすでに1860年12月14日（万延元年11月25日）三十一歳という若さで亡くなっており、[22] フルベッキの生徒とはなり得ない。西吉十郎は1854年（安政元年）に英和対訳辞書の編集に従事しているので、[23] 語学にはすでに通じていたであろうから、フルベッキに初歩から学ぶとは考えにくい。通弁の需要は多く、上達するとすぐに即戦力として江戸や神奈川などに派遣されるので、長崎に一定期間留まっている者となると、ある程度人数が限られてくる。また、蘭通詞は夭折した者が多くいて、人数は減少傾向にあった。特に「二人の生徒」

は常に行動をともにしていたようなので、同じような条件を満たす二人の蘭通詞は見あたらない。その他、済美館に関与した蘭通詞は数多くいるものの、年齢、履歴等で見合う人物はいない。

唐通事はどうであろうか。蘭通詞の方はすでに1809年（文化6年）から、英語をオランダ商館員から学んでいる。西欧語は本来蘭通詞の兼学で、唐通事は中国語専門である。それだけに英語はじめ、その他の語学を兼学する唐通事は蘭通詞ほど目立たない。

唐通事は幕末になって長崎のアメリカ人、オランダ人、中国人等から英語やその他の語学を学んだ。蘭通詞だけでは通弁が間に合わなくなってきたのである。オランダ語、中国語が廃れ、他の西欧語が脚光を浴び、それを学ぶことが出世の糸口となってきたことであろう。1859年2月25日（安政6年正月23日）、長崎奉行は支配向に達して、鄭幹輔以下六人の唐通事に英語の伝習を命じた。

「唐通事鄭幹輔外六人英語為稽古、亜米利加蒸気船江罷越候儀、去二日相達置候処、右船出帆致し候ニ付、以来出島ニ罷在候亜人ワルシより、同所并於唐通事会所為致稽古候間得其意、筋々江可申達置候」[24]

ここには具体的に名前が挙がっていないが、この年にアメリカ人、ワルシ(Walsh)から学んだ唐通事は鄭幹輔・游龍彦三郎・彭城大次郎・太田源三郎・何礼之・平井義十郎とその他一人である。[25] 済美館が語学所と呼ばれた1863年（文久3年）に、何礼之[26] と平井義十郎[27] が学頭になっている。残りの四人の唐通事が済美館に関与してることを示す文献はない。何と平井は共に英語やフランス語を学んだ同志であり、英語伝習所の生徒であったが、済美館の学頭に抜擢された。何は最初独学で英語を学習していたが、1859年（安政6年）に来日した米領事ウォルシュや宣教師マックゴーワン(Daniel Jerome Macgowan,1814-1893)・ウィリアムズ(Channing Moore Williams,1829-1910)・リギンズ(John Liggins,1829-1912)・フルベッキなどに英語を学び、通訳・読書が自由になったという。長崎が正式の通商開始となると、英語力を買われて税関業務に従事することを命じられた。[28] 1860年（万延元年）には稽古通事から小通事過人に昇進、1861年（文久元年）には小通事助となり[29] その後も出世を続

ける。平井も同じように順調に昇進している。何と平井は「通訳」、「役所で昇進」、「済美館関連」という条件に当てはまる。蘭通詞の楢林栄左衛門などは学頭になる以前から大通詞であったが、何と平井は嘉永年間にはまだ稽古通事に過ぎない。学頭に選ばれたのは大変な出世である。しかし、最も重要なフルベッキとの関係について、フルベッキに英語を学んだというだけでは頼りない。長崎で彼に学んだ者は数え切れないほどいる。何礼之・平井義十郎とフルベッキの関係を記述しているものをさがす。

前島密は何礼之に親炙し、長崎で師弟関係にあった。前島の自伝『鴻爪痕』によると、何礼之は1864年1月21日（文久3年12月29日）に出航した池田筑後守一行の遣欧使節の通訳官に命じられ、前島はその従者として行くことになっていたのだが、事故で長崎に引き返して来た。[30] 続けてこう書いている。

「余は茲に何氏に対して深厚の謝意を表せざるを得ざるを感ず。先生は終日霜路を歩みたる疲労を忍び、毎夜熱心に英語を教授せられ、余も亦これに感激して燈火に三更を過したること希ならざりしが、長崎に帰るや、家塾を開き、余を塾長と為し、長崎奉行に紹介し、英学校の学生とし、或は米人ウエルベッキ氏に授業を依頼する等、学事上懇篤なる援助を与えられたるなり。然れども氏は多用にして授業の暇少く、余も亦寄食するの憚多きを感じたり。当時遊学生中資力足らずして困難を感ずる者鮮からざるを聞き、彼等の為に少費の合宿所を設け、互に相救うの急なるを思い、瓜生寅氏にその所長と学長とを依頼し、何先生にはその所以を談じ、明諾を得て培社と称する学舎を開設せり」[31]

前島は何礼之が家塾を開設したことと、前島自身遊学生のために合宿所を設けたことを述べている。何の私塾は1865年（慶応元年）には長崎奉行服部左衛門佐常純から多額の財政的援助を受け、校舎の新築もなり、塾は準官立と言えるものとなった。[32] 長崎奉行は何の私塾を援助するほど、何を認め懇意であったのだ。「長崎奉行を知る」条件に何は合致する。何は自分の私塾へ「米人ウエルベッキ氏に授業を依頼」した。私塾の開設は文久四年である。[33] 文久四年は二月十九日までで、二十日からは元治と改元される。前述したように、フルベッキが済美館で教え始めるのは元治元年七月一日であるので、それ以前に何

とフルベッキは交友があったことがわかる。何は私塾開設時点でフルベッキを招き、「学事上懇篤なる援助を与えられる」ほどの関係がすでにあったのだ。何と平井が済美館の学頭になってすぐに、フルベッキが招かれたのも、二人が長崎奉行に推挙したと考えられる。

さらに、何・平井・フルベッキの関係を示すものを探す。1861年（文久元年）、宗福寺内に唐通事達が拠金してその子弟のために〈訳家学校〉を設置し、シナ語と英語の教授を行った。英語の世話人に何礼之と平井義十郎の名前がみえる。[34] 宗福寺は宣教師ウィリアムズやフルベッキが当時居住していた場所である。何や平井はフルベッキに教えを受ける便宜を考え、宗福寺に〈訳家学校〉を置いたと推測できる。1867年（慶応3年）何は開成所教授として東京に行き、さらに大坂に行く。1868年10月（明治元年9月）、フルベッキが大坂に行った際、当時大坂にいた何は彼とその子供達のためのみやげ物を携え会いに来たと言う。東京で英語学校がまもなく設置されるであろうことも告げている。[35] それまでの長年の交際で、フルベッキの家族のことまでを知る親しい関係であったと推測できないだろうか。他の唐通事で、フルベッキとの継続した交流を示す資料は見つからない。また、当時蘭通詞と唐通事は相容れないところがあり、何礼之などは長崎で英学を志したときも、蘭通詞について学ぼうとせず、最初は独学で始めた。蘭通詞と唐通事が共に学ぶということはなかったと見てよいだろう。

フルベッキ書簡の記述を手がかりに、済美館関連の人物を調べることで、何礼之と平井義十郎という人物が浮上した。何と平井はフルベッキが記した「二人の生徒」の条件にすべて当てはまる。彼等の関係は単なる教師・生徒ではなく、かなり親しい間柄であったこともわかった。何と平井はフルベッキの最初の生徒二人であると特定できる。特に何礼之を通しての人脈はフルベッキ自身にとっても重要であり、東京に行った後も途切れることなく継続するのである。

4.何礼之塾の生徒達

前述したように何礼之は文久四年に私塾を開設した。フルベッキは何礼之の

私塾に教師として招かれ、助言を与えていたのであるから、ここで学んだ生徒達の多くはフルベッキとも緊密な関係を持つ。何礼之塾は1867年（慶応3年）、何が開成所教授として招かれたことで自然消滅し、短命に終わる。何の塾は大久保利謙氏の『幕末英学史上における何礼之』[36]に取り上げられ、その存在が明らかにされたが、塾の詳細はわかっていない。主要塾生名簿が残っているので、それをもとに何礼之塾の塾生達とフルベッキの関係を考察し、その人脈がどのように展開していくかを考える。

何礼之の私塾で学んだ者達は次の通りである。

巻退蔵（男爵前島密）　林謙三（男爵安保清康）　中村某（青江秀）　瓜生雷吉（瓜生震）其他数十名アリ

慶応元年の主要塾生名簿

薩摩　前田弘安（前田正名）　原田荘助　白峰駿馬（実は越後長岡）　錦戸広樹（当時薩摩の士と称した陸奥宗光）　谷村小吉　岸良俊之丞（兼養）　川崎強八　高橋四郎左衛門（高橋新吉）　鮫島武之助外数十名

加賀　高峰譲吉　芝水晶之進外二十余名

土佐　野村維章　萩原三圭外十余名

肥前　山口範三（山口尚芳）　牟田豊　野田益晴外数名

阿波　高橋顕正（芳川顕正）　山田要吉　高良二（蘭医高良斉の子）外十数名

筑前　井上良一　本間英一郎　栗野慎一郎其他

其他熊本、久留米、柳川、松前、ノ諸藩及地役人子弟併セテ塾生百数十名、塾外生二百名算ス[37]

塾生は薩摩出身者が最も多く、塾生百数十名、塾外生二百名とあるのでその規模はかなり大きなものであった。何は済美館の学頭もしていたわけであるから、彼の塾生達は何の塾で学ぶ傍ら、済美館とも密接な関係があったであろう。加賀の高峰譲吉は後にアメリカに渡り、アドレナリン抽出など多数の発明、発見をする。薩摩の前田正名、高橋新吉は留学資金を得るため、フルベッキに指導を受けて1869年（明治2年）に薩摩辞書を刊行した。肥前の山口尚芳は副使

として、福井の瓜生震は随行員として、一等書記官の何礼之とともに岩倉使節団に同行する。後に郵便制度を創設した前島密は長崎時代からすでに郵便制度に興味を持っており、在崎の宣教師ウィリアムズ等に通信について質問していた。[38] 1870年5月（明治3年4月）、租税権正に任じられたとき、「フルヘッキ氏に英米の租税法書を借り、又はその説を聞くなどして能く勉むるところあらんとしたる」[39] のであるから、新政府出仕後もフルベッキの助言を受けていた。

この塾生の中、一際注意を引くのは陸奥宗光・白峰駿馬（白峯駿馬）・野村維章である。三名ともれっきとした海援隊士である。陸奥と白峰は1865年6月（慶応元年5月）、坂本龍馬等と来崎し、亀山社中をおこすと共に社中の中核を形成し、後に海援隊に属する。[40] 薩摩藩士と称していたのは、薩摩藩から財政援助を与えられ、生活費の支給を受けていたからであろう。『坂本龍馬辞典』に、野村維章が、坂本龍馬の姪春猪の配偶者で龍馬の兄権平の養嗣子である坂本清二郎と、土佐を脱走してきたことが紹介されている。[41] しかし、慶応元年の何礼之の塾生名簿に野村維章の名前があるのだから、1867年（慶応3年）に脱藩した清二郎と一緒に土佐を脱走してきたというのは矛盾している。亀山社中の創設されたのは1865年7月（慶応元年閏5月）頃であり、海援隊結成は1867年5月（慶応3年4月）であるので、野村維章は亀山社中創設の頃から長崎で活躍していたのであろう。野村は1868年（明治元年）、長崎振遠隊軍監となり奥羽に出征した。維新政府に入って法官となり、控訴院検事長になっている。白峰駿馬は越後長岡藩士で、神戸海軍操練所時代に龍馬と知り合う。この白峰駿馬は海援隊士、菅野覚兵衛（千屋寅之助）と共に、維新後の1869年（明治2年）あるいは1870年（明治3年）に米国ラトガース大学に留学している。龍馬生存中に起こった、いろは丸事件の賠償金を留学の費用にあてたらしい。[42] 当時ラトガース大学に留学生の大部分を紹介していたのはフルベッキであるので、彼等二人もフルベッキの仲介により留学を果たしたものと考えてまず間違いないであろう。白峰はニューヨーク海軍造船所で造船技術を学び、生涯造船業に貢献する。石附実氏は『近代化の推進者たち』の中で白峰駿馬のラトガース大学留学を詳細に記している。[43] ところが、菅野覚兵衛に関して、石附氏は『近代

日本の海外留学史』の巻末にある「海外留学者リスト」で、明治四年に県費でアメリカに留学、と簡単に記しているだけである。[44] 菅野覚兵衛は土佐の頃から坂本龍馬とは縁が深く、龍馬没後、お龍の妹を妻としている。龍馬の勧めで勝海舟門についた。神戸海軍操練所以来、亀山社中、海援隊と白峰駿馬と共に行動しているので、一緒にアメリカに留学したというのは信憑性がある。陸奥宗光・白峰駿馬・野村維章・菅野覚兵衛等、少なくとも海援隊士中四名がフルベッキに教えを受けていた可能性がある。

陸援隊の中岡慎太郎も長崎で済美館を訪れた形跡がある。1867年4月18日（慶応3年3月14日）の日記に、次のような記述がある。

「十四日、朝小雨。四ツ比長崎に著し、浜の町田崎と云家に投じ、沐浴昼飯、済英館に遊び、小曾根を訪ひ、菅野（覚兵衛）、中島（作太郎）に逢ひ、門田（克兵衛）氏邂逅す。此夜別酌、八ツ比発し時津に至る」[45]

『海援隊遺文』の著者、山田一郎氏は「済英館は済美館のことではないだろうか」[46] としている。もう少し想像をしてみると、中岡慎太郎は済美館で学ぶ海援隊関係者、あるいは海援隊士を訪れたのかも知れない。塾生の福井藩士、瓜生震も海援隊とは関係が深く、隊士に名前は挙がっていないものの、海援隊に所属して活躍したという。[47]

「東洋のルソー」と言われた中江兆民は1865年（慶応元年）に土佐藩留学生として来崎している。兆民の蘭学の師匠、細川潤次郎の推薦であったという。[48] 長崎で坂本龍馬と親交があったことはよく知られている。幸徳秋水は『兆民先生』で中江兆民がはじめてフランス語を学んだ時のことを書いている。

「先生十七八歳始めて洋学に志し、萩原三圭先生・細川潤次郎先生に就て和蘭の書を学び、慶応元年十九歳にして、高知藩留学生となり、長崎に遊び、平井義十郎先生に就て、始めて仏蘭西学を修めたり」[49]

中江兆民は長崎で平井義十郎についてフランス語を学んでいた。平井は当時何礼之と共に済美館の学頭であり、フランス語の教授もしていた。長崎における兆民の動向はよくわかっておらず、何処で、どのようにフランス語を学んだのか、決定的な資料はないようである。どの文献にも指摘されていないのだが、

兆民が土佐でオランダ語を学んだ萩原三圭は、何礼之塾の塾生名簿に名前が挙がっている。兆民は何礼之塾の塾生である萩原を通して平井義十郎と知り合ったのかも知れない。そうすると、兆民が済美館や何礼之塾で学んでいた可能性は十分に考えられるのである。萩原三圭は細川潤次郎について蘭学を学び、長崎では医学校に入って医学を学んだ。1869年（明治2年）、日本で初めての医学留学生として、ドイツのベルリン大学に入った。再度のドイツ留学で、医学博士の学位を得て、小児科の権威として知られる人である。[50] フルベッキは松本良順の子が長崎に遊学したときに、ドイツ語を教授している。[51] 萩原三圭もフルベッキからドイツ語を学んでいたのだろうか。細川潤次郎もまた、後に東京で原書翻訳などを通じてフルベッキとの交流は深い。様々な人物が済美館や何礼之の塾に関係していたと思われる。

陸奥宗光・白峰駿馬・野村維章たちが何礼之の主要塾生名簿に名前が残っており、菅野覚兵衛や白峰がラトガース大学に留学したという事実があるのに、海援隊士が何礼之塾や済美館で学んだことを指摘している文献がないのは、何故だろうか。海援隊約規の第四則には「凡隊中修業分課政-法　火-技　航-海　汽-機　語-学等ノ如キ　其志ニ随テ執之　互ニ相勉励　敢テ或ハ懈ルコト勿レ」[52] とある。坂本龍馬は語学を含む諸学問を、隊士達に修業させようとしていたのは明らかである。龍馬が隊士の何人かに何礼之について学ばせたと考えてもよいのではないだろうか。

全くの想像の範囲でしかないのだが、龍馬や中岡慎太郎が、済美館や何礼之塾の海援隊関係者達を通してフルベッキと知り合い、フルベッキから欧米諸国の知識を得たこともあったかも知れない。

フルベッキ没後、翌年の1899年（明治32年）12月に、青山墓地に記念碑が建てられた。発起人にはフルベッキと縁の深い本野盛亨（周蔵）、何礼之、前島密、副島種臣等の名前が挙がっている。平井義十郎などすでに死去していた生徒達も多いものの、発起人には彼等にならんで何礼之の塾生名簿にある名前が見える。肥前の牟田豊、阿波の高良二、そして白峰駿馬等である。[53] これを見ても、フルベッキと何礼之の塾生達の関係が浅からぬものであったことが推測

できるのである。

フルベッキの伝記である『明治維新とあるお雇い外国人』には「(陸奥宗光は) 外国人宣教師の家にボーイとして住み込んで、その妻から英語を学んだという。これはおそらくフルベッキの家である」[54] とある。事実であれば、フルベッキとの関係の上で興味のあるところであるが、事実を示す文献は見当たらないので真偽のほどはわからない。陸奥は神戸の勝海舟の「海軍塾」で一緒であった横井小楠の甥達、横井左平太・大平兄弟と慶応元年に長崎で写真を撮っている。[55] 横井左平太・大平兄弟は当時、長崎でフルベッキに学んでおり、1866年（慶応2年)、フルベッキを介してアメリカに留学する。陸奥は「小伝」で、「余は大隈伯とは維新前長崎在学中より締交浅からず」[56] と述べている。大隈は致遠館の創設者である。陸奥は何礼之の塾や済美館以外にも、致遠館とも関係していたのかも知れない。同じ何礼之塾で学んでいた前田正名とは特に懇意で、寝起きを共にしたという。[57] 陸奥にとって長崎滞在は、亀山社中にいながらにして、知識吸収以外にも、様々な人物との交流を通して後の活躍に備え基礎を築いた時期であったと言えないだろうか。何礼之とは特に親しかったフルベッキは、何礼之塾はじめ、済美館、致遠館で教授していたのであるから、海援隊に関連した、この一連の人物達もフルベッキに学んでいた可能性が十分考えられるのである。

1869年（明治2年）夏、陸奥が兵庫県知事であったとき、県下に英語教師を招聘するため何礼之に人選を依頼し、何は星亨を推薦した。[58] 陸奥が和歌山藩に帰藩すると、星も和歌山藩に雇われ、神奈川県知事に就任すると星も横浜へと向かう。星が世に出るのには陸奥の推挙が非常に大きい。星が陸奥と知り合うきっかけを作ったのは、何礼之塾の塾頭であった前島密であった。1867年（慶応3年）春、小泉家の養子となった星亨に前島は英学を教えた。星が小泉家を離縁された後も、星の才能を認めていた前島は身柄を引き取り開成所に通わせた。1867年9月（慶応3年8月)、前島が神戸開港事務官となって赴任する際、同年8月（旧暦7月）長崎から転任してきた何礼之に星を託した。星はその後、1869年（明治2年）大坂で瓊江塾を開いていた何に頼りその塾頭となる。[59] そ

して、何礼之に推挙されて英語教師を探していた陸奥宗光と知り合うことになる。陸奥宗光、何礼之共に星の才能を見抜き、彼の両親の世話を引き受け、政治家星亨を支持し続けた。星はフルベッキと直接の関係はない。だが、フルベッキに学んだ何礼之を通して前島密・陸奥宗光という交流の線上に星亨が浮上する。フルベッキの人脈は間接的にも繋がっていった。

5. 伊藤博文と長崎英学学修

伊藤博文もまた長崎でフルベッキと親交があったことや、変名で入門していたこと[60]は従来から言われている。だが、フルベッキとの関係を直接示す文書は存在しない。また、伊藤博文は大隈重信や副島種臣のように、長期間長崎に滞在して学修したこともない。しかし、多くの文献で伊藤博文がフルベッキ門についたことを断定している以上、何らかの関係は存在するはずである。フルベッキは明治二年に上京するまでに、大坂や佐賀を訪問したことはあるが、長崎以外に長期滞在したのは上海だけである。一方、博文は長崎に腰を据えて住んだことはないものの、幕末、特に慶応年間には頻繁に来崎している。二人に何らかの関係が生じたとすれば、はやり長崎としか考えられない。長崎での博文の行動と交友関係を詳細に追ってみることで、フルベッキとの関係の可能性を推察する。

伊藤博文は周知の如く、1863年6月27日（文久3年5月12日）に長州派遣の留学生五名の一人として井上馨等と共にイギリスに向けて出立している。しかし、ロンドン滞在中、長州藩の各国船艦砲撃及び薩摩藩の英国艦隊との交戦を「タイムス」紙の報道で知り、攘夷の方針を阻止すべく井上馨とともに帰朝する。[61]わずか六ヶ月ほどのイギリス滞在であり、語学を学修するにはあまりにも短い期間であった。博文がイギリス留学以前に、長崎を訪れることはなかったようである。英語力はどうかというと、「英会話は度胸会話で達者であったが、読み書きはまだ不十分」[62]という程度であったらしい。

慶応になると博文はかなり頻繁に長崎に行くようになる。ほどんどが武器の調達や軍艦の買い入れであり、慶応年間の三年ほどで十回前後来崎している。

滞在期間は長くても二ヶ月余り、数日で下関に戻って来たことも度々あった。最初の長崎での汽船や鉄砲の買い入れは1865年（慶応元年）の夏で、博文は吉村荘蔵、井上馨は山田新助と変名し薩摩藩士と称した。[63] 海援隊士に薩摩藩士への紹介の依頼も行っている。[64] 博文の長崎滞在は短期間だが、武器の買い付け以外にも様々な人物との交流があり、上海に足を伸ばすなど、落ちついて英学修行を行う暇などなく多忙であるようだ。しかし、ただ一度、比較的時間の余裕があり、一人で長崎にいた時期がある。1867年10月23日（慶応3年9月26日）、博文は下関から長崎に向けて出発する。グラバー商会と交渉し、同年10月30日（慶応3年10月4日）に汽船買い入れの契約を結ぶ。この汽船を薩摩藩の船という名目で馬関に回航させるよう取りはからい、仕事は終了した。そして、英艦に便乗するための機会を待つため旧暦十一月の下旬まで長崎に滞在することになった。二ヶ月近くもの間、仕事もなく時間があった。その間の事情は『伊藤博文伝』には次のようにある。

「（前略）公は薩藩士吉村荘蔵と称して大徳寺の別坊に寄宿し、諸藩の志士と交はりしが、その中に阿波藩の医学生にて芳川賢吉（顕正）といふ者あり、同人は英学の造詣深く相当の見識もあった。公は英語の会話は堪能なりしも、読書力は未だ十分ならざりしかば、芳川を自分の寓居に同宿せしめ、用務の傍ら読書の講修を受けた。（後略）」［常用漢字に変換］[65]

博文に英語を教えた芳川賢吉（後、芳川顕正）というのは、どういった人物であったのだろうか。芳川は阿波の医師の家に生まれ、長崎で医学・英学を学んだ。慶応元年の何礼之塾の塾生名簿に名前が見える。長崎文献社編の『長崎游學の標』によると、「1862年長崎留学したが、病気のため帰国。二年後再び長崎に至り瓜生三寅［瓜生寅］、何礼之助［何礼之］について英学を修める」[66] とある。フルベッキの初期の生徒何礼之と瓜生寅に学び、何礼之塾にいたのであるから、当然フルベッキの生徒でもあったはずである。同じ何礼之塾の塾生の前島密は1865年（慶応元年）に、英学教師として薩摩藩の開成所に招かれている。前島密が一年ほどで辞めた後を受けて、英語力を買われた芳川が赴任している。[67] よほど語学に通じていた人物であったのだろう。芳川は1870年（明

治3年)、伊藤博文の推薦で大蔵省出仕となる。同年12月23日（旧暦11月2日)、博文が貨幣制度視察のため渡米するに及んで随員として同行した。その後も、博文の後押しがあって文部大臣、司法大臣、内務大臣、逓信大臣等を歴任し、枢密院副議長、國學院大学長になった。長崎で博文に英語を教えたことがきっかけで世に出て、認められた人物であると言えるだろう。何礼之塾には薩摩藩士が多く海援隊士もいたから、彼等を通じて博文は芳川と知り合ったのかも知れない。

また、上述の『伊藤博文伝』では「公は薩藩士吉村荘蔵として大徳寺の別坊に寄宿し」そして、「芳川を自分の寓居に同宿せしめ、用務の傍ら読書の講修を受けた」とある。吉村荘蔵こと伊藤博文は大徳寺を借りて住み、そこで芳川顕正から講修を受けていた。

フルベッキは1859年（安政6年）来日以来、長崎市内の宗福寺に住んでいた。そして、1864年7月28日（元治元年6月25日）に宗福寺から大徳寺の境内に移転する。宗福寺からは五百メートルほど西にあり、長崎養生所のあった所に隣接していた場所である。1869年（明治2年）春に長崎を離れるまで家族とともに大徳寺に住んだ。つまり、伊藤博文が慶応三年に大徳寺に滞在していた頃、フルベッキもまた同じ寺院に住まっていた。その上、大徳寺に来て博文に英語を教えていたのは、何礼之の塾生である芳川顕正である。伊藤博文とフルベッキの間に師弟関係があったとすればこの時期であるとしか考えられない。

フルベッキは済美館・致遠館で教え、慶応三年頃までには教師としては一流の名声を得、その噂は広まり、様々な人物の来訪があった。評判のフルベッキ先生の教えを受けようと、向学心に燃える若者、伊藤博文が考えただろうことは容易に推測できる。また、芳川は薩摩藩に教師として招かれるほどであったのだから、当然何礼之塾でも目立った存在であっただろう。フルベッキにとってもおそらく大勢いる生徒の中で、印象に残る生徒だったであろう。

6. フルベッキと生徒達の写真

フルベッキが長崎滞在中に生徒達と撮った写真が二枚ある。一枚は幕府（済

美館）の生徒達（写真１）と、もう一枚は佐賀（致遠館）の生徒達（写真２）とのものである。両方とも長崎の写真家、上野彦馬によって彼の写真スタジオで撮影された。済美館の生徒の方は名前もほぼ判明している。ところが、致遠館の方は人物名、写された年代が確定できず、以前から物議を醸し出している。昭和四十八年と昭和五十二年の『日本歴史』紙上において、「維新史上解明されてない群像写真について」[68] と題して、島田隆資氏が佐賀の生徒達の写真（写真２）について人物の判定を独自の調査で行っている。島田氏はこの写真に西郷隆盛・従道兄弟はじめ、大久保利通、伊藤博文、副島種臣、横井小楠、江藤新平、小松帯刀、五大友厚、中岡慎太郎、その他蒼々たる人物が写っていると断定している。それは全く間違いである。また、写真撮影は慶応元年と仮定しているが、後述するように、慶応年間にこの写真が撮られた可能性は皆無である。最初にこの写真が紹介されたのは、明治二十八年発行の雑誌『太陽』第一巻第七号で、戸川残花による「フルベッキ博士とヘボン先生」[69] においてである。フルベッキ存命中のことであり、戸川残花は同時代の人であるにもかかわらず、不思議なことに写真に写る人物について全く具体的に触れていない。それだけに、謎の多い写真である。

写真１
（幕府の生徒達）

写真２
（佐賀の生徒達）

上野彦馬の写真に詳しい彦馬の子孫、上野一郎氏は二枚の写真ともに、フルベッキ上京前に記念として明治二年に撮られたものであると推定しておられる。幕府の生徒の方は明治二年に撮られた可能性は確かに高い。しかし、佐賀

の生徒の方はその可能性はない。上野氏の写真撮影年代推定の根拠を紹介するとともに、それが事実ではないことを証明する。また、佐賀の生徒達の写真を別の角度から調べ、撮られた年代を独自に推定する。

上野氏によると両方の写真には説明書きが貼付されている。幕府の生徒達の写真の説明書きは以下の通りである。

「附記

安政五年七月（西暦千八百三十八年）「徳川十四代家茂公」英語伝習所ヲ岩原郷官舎内ニ置キ楢林栄左エ門、西吉十郎頭取タリ蘭人「ウイルヘルス」「デボーゲル」英人「アレッチエル」等相次デ教師タリ文久二年「西暦千八百六十二年」片渕郷組屋敷及武館ニ移シ英語所トシテ中山右門太頭取タリ文久三年七月（西暦千八百六十三年）立山奉行所境内ニ移シ何禮之助（礼之）平井希昌（義十郎）学頭タリ同年十二月江戸町ニ移シ○○所ト改メ米人（元蘭人）フルベッキ教師タリ慶應元年正月假語学所ト改メ魯・英・蘭・佛・各語学ヲ教授ス・・・・以下・・・・」[70]

この説明書きは済美館が最初「英語伝習所」と呼ばれた時から、「假語学所」と改められた時までの記述である。幕府の学校の変遷を述べたものであるので、幕府の生徒達の写真の説明書きとしては間違いない。また、判読し難い文字があるものの、生徒達の名前が書かれていて、図１に示すようにほぼ名前が判明しているので説得力がある。

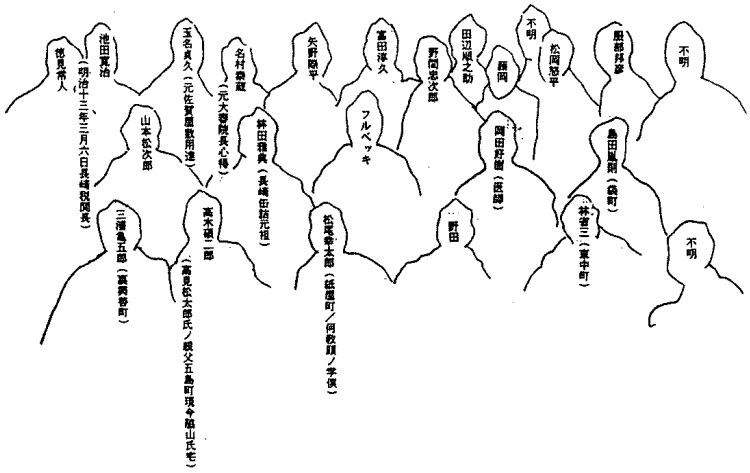

図１（写真１の人物名）

問題はもう一方の佐賀の生徒達の写真である。上野氏は佐賀の写真の説明書きを次のようにしている。

「慶應元年八月長崎府新町ニ済美館ヲ設立シ後廣運館ト改称ス明治初年同館担任教師「フルベッキ」氏東京出発ノ時重ナル門人記念トシテ新大工町上野彦馬寫真館ニ於テ撮影セリ」[71]

これは、全く事実ではない。佐賀の学校は「致遠館」であり、ここにある「済美館」は幕府の学校である。この説明書きは、上述の説明書きに続いて、幕府の学校（済美館）のことを述べたものである。何かの理由で、誤ってこの説明書きが致遠館の生徒の写真に付けられた。

上野氏は『明治百話』にある、これらの写真について述べられている記述をもう一つの根拠としている。次の個所である。「(前略）ここに二枚の写真があります。(チョンマゲ大小の書生三十名ばかりと、他に五十名ほどの人々主人を取巻いて写る）ハイ日本第一の写真師でしょう、上手でした。長崎の上野と申す写真師です。私は長崎に居りまして、この書生はみな長崎で教えたのです。一方は立山で、一方は新町。新町のは佐賀藩のお侍、立山のは幕府のお侍(下略)」[72]

これはフルベッキのことばと見て間違いないが、これが理由で「新町」のは「佐賀」で、「立山」のは「幕府」とされてしまった。事実は「新町」に置かれたのは「済美館」であり「立山」に置かれたのは「語学所」で、どちらも幕府の学校、名称は違うが全く同じ学校である。[73] この記述はフルベッキが後に回想したもののようだが、彼は明らかに学校とその設置された場所を混同している。人の晩年の記憶など信じるわけにはいかない。単に幕府と佐賀の学校の知識がないために、こういった間違いが起こっただけなのだ。佐賀の生徒達の写真については、振り出しに戻って考え直さなければならない。では佐賀藩士との写真（致遠館の生徒達との写真）を写っている人物から考察するとどうなるのであろうか。グリフィスの*Verbeck of Japan*にこの写真に関する記述がある。

「彼が［フルベッキが］故郷［アメリカ］に送った、教師と生徒達の写真は日本の歴史家にとっては非常に価値ある資料であろう。この若者達の中には、

後に政府の様々な部署で大きな影響力を持った多くの人物を認めることができる。各省の長、大臣、海外派遣の外交官、そして皇国の首相になった人物など。本の助けや、人に聞くことなく著者が思い出したり、判別できるのは岩倉兄弟と大隈伯［大隈重信］である.....」[74]［著者訳］

グリフィス(William Elliot Griffis,1843-1928)はフルベッキを通じて、御雇い外国人として福井で教師をするため、1870年12月29日（明治3年11月8日）に来日した。彼は岩倉兄弟と大隈重信を容易に判別できると言っている。グリフィスが三人を判別できると自身を持って断定するのには理由がある。岩倉兄弟、即ち岩倉具視の息子達、具定と具経は佐賀藩の致遠館でフルベッキの下で学んだ後、1870年（明治3年）にアメリカ、ニュージャージー州、ラトガース大学に留学する。グリフィスは同大学を卒業し、その頃、日本人留学生の世話をしたり、日本人学生に教えたりしていた。グリフィス自身が日本に来ることになり、留学生達から日本語を学んでもいた。ラトガース大学に留学した岩倉兄弟のことも、もちろんよく知っていた。[75]

グリフィスは来日してまもなくの1871年2月10日（明治3年12月21日）頃、福井藩との契約書の件で外務省に行き、大隈重信と会う。[76] 福井との契約書の英文はグリフィスが作成した。後に彼が書いた "Okuma : The Educator of a Nation" という「大隈論」の中で、"government of Fukui in Echizen" とグリフィスが福井藩を英訳したのに対し、大隈は "local authorities" ということばを使うよう指示したとある。彼は"Government" ということばは、帝国の政府、つまり国家 (the State)という範疇にあてはまる時だけに使うのを許せることをグリフィスに告げた。[77] こういった細かい指示を受けたことで、グリフィスの大隈に対する印象は強かった。後年、大隈についての論文・記事をいくつか書くほど、大隈には興味があったのである。岩倉具定・具経そして大隈重信はグリフィスの印象に強く残る、彼のよく知る顔であった。写真を見てまず、自分が知るこの三人が目についた。三人が写真に写っている可能性は非常に大きい。

岩倉具定・具経・大隈重信がフルベッキと共に写真に写っていると仮定すると、この四名が同時期に長崎にいた時期が問題になる。そこで、この四名が会

同する時期を調べる。

『鍋島直正公伝』によると、岩倉具視は佐賀の教育に感心し、息子達を佐賀に遊学させようとした。岩倉のこの申し出を断る書簡を、1868年12月3日（明治元年10月20日）付で送った時には、岩倉具定・具経兄弟はすでに佐賀に来ており、佐賀藩は仕方なくフルベッキに教導をまかせる。[78] この頃、大隈は長崎で起きた英国水兵斬殺事件の審理のため長崎に滞在していた。1868年10月18日（明治元年9月3日）前後に来崎する。[79] 事件解決後、1869年1月30日（明治元年12月18日）に京都に戻っている。[80]フルベッキは1868年10月17日（明治元年9月2日）に大坂に向けて旅立ち、同年10月25日（9月10日）頃までには長崎に帰る。[81]

以上から写真の撮られたのは、岩倉具定・具経の来崎した1868年12月（明治元年10月）頃から、大隈が京都に戻る1869年1月30日（明治元年12月18日）までの約二カ月間の間であると推定できる。

人物から見て撮影時期を明治元年と推定したが、写真にあるスタジオ自体、明治元年に実際に使われていたかどうかを上野氏に問い合わせた。この点に関して、上野氏は、「済美館の写真の右端に欄干が見えており、知る限りでは、明治になって彦馬が輸入したものである。慶応年間にはスタジオはもっと粗末で、これらの写真がとられたスタジオ自体慶応年間にはなかったもので、明治になって建てられた。どちらの写真もスタジオの石畳、敷物、左端にある戸が同じことから、ほぼ同時期に撮影されたものなので、二枚とも明治二年にフルベッキ上京に際して記念に撮られたと考えるのが自然だろう」と言う。しかし、「明治元年に撮られた可能性は否定できない」としている。

二枚の写真ともよく似たものであり、写真に写るスタジオの仕様が同じことから、同じ時期に撮られたという先入観を持たれやすい。しかし、スタジオは明治元年に使用された可能性が否定できないのだ。済美館の生徒の方は貼付されている説明書きからして、明治二年撮影と推定するのはよい。致遠館の生徒の方は、写っている人物から考えると、明治二年の可能性はなく、明治元年十月から同年十二月の間に撮られたと推定する方が妥当であろう。

おわりに

一部ではあるが長崎におけるフルベッキの交友関係を明らかにした。維新後活躍することになる多くの優秀な人物達と接触したフルベッキは、日本の可能性を彼等の中に見いだし、日本はやがて西欧諸国に対抗する近代国家になると確信した。禁制下でキリスト教を押しつけても何の益もないと判断し、まず近代国家建設が急務であると考えた。そのためには何を差し置いても援助と助言を惜しまなかった。また、彼の日本への貢献の背景にはオランダ改革派の伝道局主事、ジョン・フェリスの協力も看過することはできない。伝道局の資金難など実際的な問題があったにせよ、一宣教師に自由な行動を許し、日本人留学生の世話や外国人教師派遣にも協力した。

明治の黎明期において、生徒達の支持のもと、フルベッキは教育・外交・政治・翻訳等様々な分野において重く用いられる。しかしながら、有力者の多くを教え、重要な政策に携わり、日本の近代化に大きく貢献したにも関わらず、外国人であったがために、その事実が前面に現れにくい。フルベッキ研究において多くの未知の部分を解き明かすことで、日本近代化の異なった局面がさらに明らかになるのではないだろうか。そして、長崎での人脈を辿ることは、フルベッキの全体像を探る第一歩であろう。

注

(1) 佐波亘『植村正久と其の時代』(第1巻) 教文館　1966、374頁～376頁。

(2) 本野周蔵（盛享、1836-1909）本野権太夫の養嗣子。谷口藍田、広瀬旭荘に漢学を、緒方洪庵に蘭学を学んだ。明治元年出仕、神奈川県大参事、外務権少丞、横浜税関長、大蔵大書記官、大阪控訴裁判所検事を歴任。辞官後は日就社を経営し読売新聞を発行。寺内内閣の外務大臣、本野一郎はその長男。

(3) 高谷道男訳編『フルベッキ書簡集』新教出版社、1978、39頁。

(4) 中村孝也『中牟田倉之助伝』、大空社、1995、155頁。

(5) 前掲書、158頁～159頁。

(6) 前掲書、198頁～200頁。

(7) 高谷道男、前掲書、63頁。

(8) William Elliot Griffis, *Verbeck of Japan* , Fleming H. Revell Company, 1900, p.125.

(9) 高谷道男、前掲書、68頁。

(10) 大隈重信『大隈伯昔日譚』第一巻、東京大学出版会、1980、158頁。

(11) 前掲書、157頁。

(12)『大隈侯八十五年史』、第一巻、原書房、1970、92頁。

(13) 佐波亘、前掲書、376頁～377頁。

(14) 田中彰『日本近代思想大系１　開国』岩波書店、1991、355頁～371頁。

(15) 大隈重信、前掲書、158頁。

(16) 高谷道男、前掲書、33頁。

(17) 前掲書、389頁の年表参照。大橋昭夫・平野日出雄、『明治維新とあるお雇い外国人フルベッキの生涯』新人物往来社、1988、133頁。

(18) 高谷道男、前掲書、41頁～42頁。

(19) 前掲書、58頁。

(20) 前掲書、92頁。

(21) Ibid.; p. 123.

(22) 古賀十二郎『長崎洋学史』上巻、長崎文献社、1973、160頁。

(23) 前掲書、158頁。

(24) 倉沢剛『幕末教育史の研究』第二巻、吉川弘文館、104頁。

(25) 杉本つとむ「続・幕末の洋学事情」早稲田大学図書館紀要、42号、1995、9頁。

(26) 何礼之（が・のりゆき、礼之助、1840-1923）長崎西町生まれ。父は唐通事で礼之助は天保十五年、五歳でその跡を嗣ぐ。安政元年、十五歳で清国語を学修する。開国となって、西欧語学習を志す。独学で英語を学習し、英華・華英辞書を在崎の唐人から求め得て、発音・文法をほぼ習得した。弘化元年、稽古通事。万延元年九月、小通事過人。英語伝習所で英語を学

ぶ。文久元年十一月、小通事助。済美館学頭となり、慶応三年、開成所教授並。明治二年、造幣局権判事、三年、大学小博士。四年、一等書記官として岩倉使節団に同行。のち駅逓寮出仕図書局長・内務権大丞・元老院議官・高等法院予備裁判官等を歴任。二十四年貴族院議員となり、没年まで在職。モンテスキューの『万法精理』等の訳書がある。

(27) 平井義十郎（希昌、1839-1896）長崎生まれ。嘉永五年唐稽古通事見習となり、英船乗組の清国人より英語を学ぶ。慶応三年通弁御用頭取。外国人との折衝などに当たった。明治元年二月、長崎裁判所の設置により通弁役頭取。四年八月、外務省に入り、五年のマリア・ルス号事件の際は、外務小丞として神奈川県庁に開廷の臨時法廷に陪席した。六年二月、副島種臣外務卿が特命全権公使として渡清の際は、二等書記官として随行。十九年三月、賞勲局書記官に任命され、賞勲制度整備に寄与した。二十六年十二月、退官。待命となったが、同時に米国駐在弁理公使に任ぜられ、待命期間中に死去。『万国公法』を訳す。

(28) 大久保利謙『幕末維新の洋学　大久保利謙歴史著作集5』吉川弘文館、1986、346～347頁。

(29)『明治維新人名辞典』吉川弘文館、1981、参照。

(30) 前島密『日本人の自伝１--鴻爪痕--』平凡社、1981、365頁。

(31) 前掲書、365頁～366頁。

(32) 大久保利謙、前掲書、352頁～353頁。

(33) 前掲書、351頁。

(34) 杉本つとむ「幕末の洋学事情」早稲田大学図書館紀要、41号、1995、7頁～8頁。

(35) Ibid.; p. 163.

(36) 大久保利謙、前掲書に収録。

(37) 前掲書、353頁。

(38) 前島密、前掲書、391頁。

(39) 前掲書、390頁。

(40) 萩原延壽『陸奥宗光』上巻、朝日新聞社、1997、146頁～148頁。

(41)『坂本龍馬辞典』新人物往来社、1968、151頁～152頁。

(42) 前掲書、150頁、153頁。

(43) アーダス・バークス編『近代化の推進者たち　留学生・お雇い外国人と明治』梅溪昇監訳、思文閣出版1990、160頁。

(44) 石附実『近代日本の海外留学史』中央公論社、1992、巻末の「海外留学者リスト」参照。

(45) 宮地佐一郎編『中岡慎太郎全集』勁草書房、1991、239頁。

(46) 山田一郎『海援隊遺文』新潮社、1991、268頁。

(47)『日本人名大事典』第一巻、平凡社、1979、463頁。

(48) 松永昌三『中江兆民伝』岩波書店、1993、9頁。

(49) 幸徳秋水「兆民先生」『日本の名著４４』中央公論社、1970、151頁。

(50)『日本人名大事典』第五巻、平凡社、1979、95頁。

(51) 古賀十二郎、前掲書、119頁～121頁。

(52) 宮地佐一郎編・平尾道雄監修『坂本龍馬全集』光風社書店、1978、392頁～393頁。

(53) 1898年（明治31年）9月、「故フルベッキ先生紀念金募集主意書」が配布され、募金によって青山墓地に記念碑が建てられることになった。記念碑建設の委員は和田秀豊、何礼之、辻新次、中島永元、永井尚行で、発起人は伊澤修二、稲垣信、細川護成、本多庸一、岡田好樹、渡邊洪基、加藤弘之、吉井亨、高田早苗、石丸安世、盧高朗、細川潤次郎、大木喬任、大儀見元一郎、谷森眞男、高橋是清、副島種臣、長岡護美、九鬼隆一、柳谷謙太郎、松井庸之助、菊池大麓、三橋信方、本野盛亨，曾我祐準、津田仙、牟田豊、藏原惟郭、前島密、高良二、目賀田種太郎、白峯駿馬、杉亨二、鈴木知雄、合計三十九名である。

(54) 大橋昭夫・平野日出雄、前掲書、147頁～148頁。

(55) 萩原延壽、前掲書、160頁。

(56) 蜂谷輝雄『陸奥宗光伯』陸奥宗光伯七十周年記念会編、1966、18頁。

(57) 祖田修『前田正名』吉川弘文館、1973、10頁～11頁。

(58) 中村菊男『星亨』吉川弘文館、1963、16頁。有泉貞夫『星亨』朝日新聞社、1983、16頁。

(59) 中村菊男、前掲書、23頁～24頁。有泉貞夫、前掲書、16頁。

(60) 鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭畴の生涯』大空社、1994、48頁。

(61)『伊藤博文伝』上巻 春畝公追頌會、1940、119頁～120頁。

(62) 豊田穣『伊藤博文』上巻 講談社、1987、220頁。

(63)『伊藤博文伝』前掲書、221頁。

(64) 前掲書、223頁。

(65) 前掲書、315頁。

(66) 嘉村国男監修『長崎游學の標』長崎文献社、1990、99頁。

(67) 大久保利謙、前掲書、275頁。

(68) 島田隆資「維新史上解明されてない群像写真について」『日本歴史』1973。島田隆資「維新史上解明されてない群像写真について　其二」『日本歴史』1977。

(69) 戸川残花「フルベッキ博士とヘボン先生」『太陽』第1巻、第7号、1895。

(70) 長崎県立博物館所蔵、筆者不明。上野一郎氏手書きのコピーより。

(71) 長崎県立博物館所蔵、筆者不明。上野一郎氏手書きのコピーより。

(72) 篠田鑛造『明治百話』角川書店、1974、55頁。

(73) 済美館改称は次の通りである。安政5年7月英語伝習所、文久2年2月英語稽古所（英語所）、文久3年7月語学所、文久3年12月洋学所、元治元年正月語学所、慶応元年8月済美館、明治元年広運館、明治14年長崎外国語学校、明治19年廃止。

(74) Ibid.; p. 132.

(75) 山下英一『グリフィスと福井』福井郷土誌懇談会、1979、20頁。

(76) 早稲田大学大学史編『大隈重信とその時代』早稲田大学出版社、1989、274頁。

(77) 前掲書、266頁～271頁。

(78)『鍋島直正公伝』第六編、1920、298頁～302頁。

(79)『大隈侯八十五年史』、前掲書、212頁～213頁。

(80) 前掲書、217頁。

(81) Ibid.; p. 153., pp. 157-171.